

私たちの隣にいる「ジョーカー」

石戸 諭

(ノンフィクションライター)

バットマンの宿敵ジョーカーが誕生するまでを
独自のストーリーで描いた『ジョーカー』。世界興行収入は
10億ドルを突破し、アカデミー賞では11部門にノミネートされた。
なぜ、悪役ジョーカーがこんなにも人々に受け入れられているのか、
ジョーカーという「悪」は、社会の副産物なのだろうか？

映画『ジョーカー』が、うまく理解できなかったという友人とこんな会話を交わした。「ジョーカーになるまでの出来事が、一つ一つ小さくて、なんでこんなことでアーサーが悪役になるのかわからなかったよ」「いや、むしろポイントの一つ一つの出来事が小さいことにあると思うんだよ。報われないと思ったときに人は『悪』に回る物語なんじゃない」

映画は、コメディアンを目指しながら友人も少なくどうかほとんどおらず、社会保障の網からも「こぼれ落ちていった」純粋で、心優しいアーサー・フレックが、バットマンシリーズ最大の悪役「ジョーカー」になるまでを描く。老いた母親からは「どんなときでも笑顔でいなさい」と言われ、必死に笑顔を繕っているのだが、かろうじて収入があった大道芸人の仕事では失敗を重ね、職を追われる。

失敗の理由は、彼自身に起因するものではなく、外的な要因なのだが、それでも責任は容赦なく、彼に覆いかぶさる。持病もあり、周囲からは気味悪い存在として扱われ、精神疾患の治療のために受けていたカウンセリングも、社会保障をカットとする政策と連動して打ち切られ

る。

確かに件の友人が言うように、映画の中で描かれる失敗エピソードの一つ一つはいかにも小さく、決定的なエピソードはない。うだつの上がらないアーサーは社会生活を送るのが、人よりも困難そうに描かれているのだが、彼自身は決して「悪人」とは言えない。その彼が、凶悪犯罪を起こすに至ったのは、悪人ではないのに、日々小さい失敗が連続し、社会との接点を消失していったからだ。彼は、網の間に「こぼれ落ちた」。やがて、彼はピエロメーク、そして原色を多用した派手なファッションに身を包み、ゴッサムシティを恐怖のどん底に突き落とすジョーカーへと変貌を遂げていく。

彼がおかしいのか、
それとも社会がおかしいのか

この作品で最も成功しているのは、ジョーカーを「報われない人々の象徴」として捉え直し、かつ人生の軌跡を丹念に追うことで、彼が見ている世界——それが夢想交じりのものであっても——を描き出したことにある。彼もまた社会の中で生きている。たとえ、どんな小さなことであっても、個人が生きている以上、社会と無

縁ではいられない。したがって、アーサーの周囲で起きる小さなことを徹底的に描くことができれば、その先にある大きな世界の構造が見えてくる。

アーサーという「報われない人」の世界に接近することで、『ジョーカー』はどのような世界を描いたのか。ラストシーンはいかにも象徴的である。彼の凶行を支持した人々は、ピエロメークで街頭に集い、声を上げ、日常で抱えている不満を解消すべく、アクションを起こす。そこに映し出されるのは、破壊が祝祭的な空間を生み出す世界だ。

ここに見棄てられた街がある

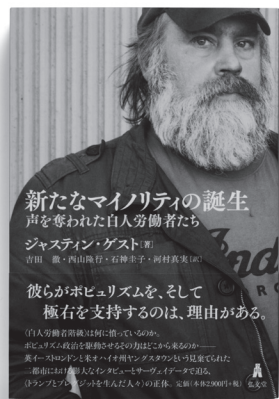
アメリカ・オハイオ州ヤングスタウン——。この街には、二つのシンフォニーホールがあり、世界水準の美術館や一万五〇〇〇人以上の学生が通う大学がある。公共施設も多く、都市の景観はいい。かつて、製鉄業で大いに繁栄したときは「月曜に電車でやってきたら、火曜には仕事にありつけた」と言われたこともあった。

しかし、時代は移り変わり、現代のヤングスタウンは中心部が荒れ果て、「古い工場の残骸と打ち棄てられた鉄道路線がマホニング川の川岸

を埋め尽くしている」。住民たちが語るのは、古き良き時代の思い出話と近隣都市への羨望、そして現状への嘆きである。(ジャスティン・ゲスト『新たなマイノリティの誕生』弘文堂、二〇一九年)

最近、ある政治学者と「マイノリティ」をめぐって議論する機会があった。従来のように人種や性ではなく、気鋭の政治学者のジャスティン・ゲストが描き出した「新たなマイノリティ」についてである。それは、アメリカではトランプ大統領を誕生させ、イギリスではEU離脱を実現させた「白人労働者」を指す。

ゲストはヤングスタウンとイーストロンドンに赴き、フィールドワークで人々の声を集めている。彼の問いと思考は極めて明確だ。ゲストは最初から彼らを理解不可能な存在として馬鹿



『新たなマイノリティの誕生』
ジャスティン・ゲスト著／吉田徹・西山隆行・
石神圭子・河村真実訳／弘文堂

にしてはいない。最終的に自分たちの首を締められるかもしれないトランプを支持するなんて、実に愚かなことだとも言わない。EU離脱が、グローバル化が進行している時代にあつて、流れに逆行しているとも言わない。調査を重ねながら、彼らがポピュリズムと極右、排斥主義を支持していく理由を探ろうとする。

二〇一九年の夏にイギリス在住のライター、ブレイディみかこにインタビュ（日本がこれ以上分断しないために絶対必要な『エンパシー』とは何か」講談社ウェーブメディア「現代ビジネス」、二〇一九年七月二〇日）をしたとき、彼女と議論になったのがエンパシーとシンパシーの違いだった。シンパシーは「共感」という感情の動きだが、エンパシーは違う。エンパシーとは「自分と違う理念や信念を持つ人や、別にかわいそうだとは思えない立場の人々が何を考えているのだろうと想像する力」、英語の定形表現で言うところの「自分で誰かの靴を履いてみる」ような知的な能力のことだと、彼女は言った。

ジャスティン・ゲストは、エンパシーを大事にして彼らを理解しようとする。だからこそ彼らは調査に口を開き、口々に現状の不満を述べていったのだろう。